

《 今年度の学校運営の反省と次年度の方針 》 大塚 優 校長

【学校経営に関する成果と課題・次年度経営方針の紙面から抜粋】

- 「みんなで考える学校」『探究』の成果。探究の定義＝課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・表現が定着してきている。「探究」を行うと必ず必要になることとしては、学び合う場面での「対話する力」や、知識を他の知識や場面とつなぐ力「知識をつないで“使える知恵”にすること」、そして、「見方や考え方を深めること」が身につくつつある。
- 「声が出る授業」「みんなで考える授業」がどの学年でも日常的に見られるようになってきた。これまでの学力の中心であった「何を教えるか」から、今求められている「何を育てるか」への転換ができてきている。令和7年度も引き続き、みんなで「対話する力」を育てていく。
- 「つなぐ、つながる、つなげる」に関わって、各学年の生活科や総合的な学習の時間における地域とのつながりができた。「よこちゃんねる」を利用したつながりが広まりつつある。また、「よこやまサミット」を開催し、地域の方と楽しく素晴らしい時間を共有できた。
- 次年度に向けた方針として、社会的な情勢を踏まえ、カリキュラム・マネジメントをツールに、「少数精鋭」「一騎当千の強者」の如き、学びの力をもった子どもたちを育てていく。探究的に学び合い、見方や考え方を深める教育課程とする。6年生の修学旅行や5年生の自然教室等は、子どもの手に委ねられるものは子どもに任せ、行事を授業化・探究化していく。避難訓練等も、教えられ、やらされる行事から、可能な限り児童主体で探究化された内容に変えていく。また、各学年の見学学習などを振り返り、なくてもよいと思われるものは廃止し、授業時間の確保にあてる。
- 次年度に向け、地域防災、学校防災について考えていきたい。特に、震度5を超える地震や豪雨水害への対応について、学校の立場から検討する。子どもたちの帰宅や引き渡し判断、子どもを帰宅させられない時の水や補食の備蓄。学校が避難所となった時の対応等、PTA や町との検討の場をもち考えていきたい。

【運営協議会の場で校長先生がプロジェクターを見ながらお話ししたこと】（上記を除く）

- 今年度は、150周年や様々な行事があり忙しかった。しかし、地域の方々と接する機会も多く、そのかわりで楽しい一年を過ごすことができた。
- 2030年から新しい教科書になる。これまで、教育は変わらない聖域的な面があったが、現代では、目まぐるしい社会の情勢に対応することが要求されているため、教育に求められることや教育内容も、めまぐるしく変化している。「対話する力」は特に子どもにつけたい力として要求されている。
（なぜかということでAIを使ったデモンストレーション。委員の方々の前で地震や水害にどう対応するかをAIと実際に対話してみせたAIの使い方のポイントについて話があった。）
- 新聞報道にあるとおり現在45分で行われている授業を5分短縮し、年間で127コマ程度を総合の探究などの個別学習に使うことも可能になる。
- 探究のまとめや表現の場である「よこちゃんねる」が山形新聞「知と学び」で取り上げてもらった。学校で行っている探究の学びについて新聞社から取材のお願いがあった。
- 各学年が地域に出向いて様々な視点から地域学習を行った。何よりよかったことが地域の方々に温かく迎えていただき触れ合えたことがよかった。地域の方々には感謝したい。
- 学校で子どもの様子を見てみると、進んで挑戦する意識がでてきている。全校朝会で問いかけをすることがあるが、以前は反応が乏しかったが、今は全校児童の前で考えを伝える子が増えてきている。得意技自慢大会や6年生を送る会などを見ている、自分たちで場を盛り上げようと考え実行している。

○児童会や委員会活動は、これまで大人の下請け的活動が多かった。子どもたちと学校課題を共有する取り組みへ変えていく。たとえば、本校の弱点として50m走の結果が極端に低いこと（体力テスト結果より）があげられる。解決のために委員会活動等で鬼ごっこの企画を実施するなど、子どもたちがアイデアを出し合い、イベントを企画、運営できるようにしたい。そのための場と時間を創出するため、次年度はロング昼休みを2回とし、そのうちの1回は委員会活動、特に課題解決のためのプロジェクト活動に充てたい。

《 今年度の学校運営の反省と次年度の方針についての質問や意見 》 各委員から

○学校は様々な刺激を与えてくれている。家庭として地域として子どもの自律のためにできることは何か。このことは家庭で子どもが小さいときから頑張るので地域も協力するというスタンスで子どもに接し、見守ることを大事にしていきたい。

○「ふるさとに思いを寄せる子ども」について、親がふるさとに思いを寄せないと子どもにこの気持ちは育たないのではないか。親同士が町のことをどう話しているかは大きい。子育て支援に厚い(金銭的)こと、大きな商業施設が近くにあり住みやすいなどは移住する要件になった。学校教育の質や内容で移住を決める家庭は少ない。

○地域を大切にすることは大事なこと。しかし、現実には厳しく、横山の祭りでも子ども神輿の復活をしたいという声があったが、親の大変さなどの理由もあり実現しなかった。親が地域へ誇りをもたないとだめだなと感じた。

○移住してきた立場なので、家庭では町のよさを伝えきれていない。子どもからここに行ってきたと聞いても自分が知らないので「そうか?」と応えることしかできない。成長すると町外に出てしまうことが多い。成長しても残って住むことができる町であってほしい。

○町外に出て暮らしてみても三川のよさを知ることも多くある。それはそれでいい。三川のよさは住んでいる人たちの人柄がよいこと。それを感じ三川に戻ることができるようであればよい。

○自分が育った小学校は学年5クラスもある学校。横山に住んで学年1クラスの学校に入れることが心配もあった。その時、単学級の学校でもいいことがいっぱいあるから、しばらく様子を見てくださいと言われた。幸い何事もなく卒業し、近所だった子とは成長しても連絡を取り合っている。三川を離れてはいるが、三川のことには思っているようだ。小さかった時に嫌な思いをしていなかったからと思う。

○日課表に「ロング昼休み」とあるがどのようなものか。説明を聞いていいなと感じた。

○成長した子どもがしばらくぶりで三川に帰ってきて「やっぱりいいな」と感じていることがよかった。

○自分が小学生の頃、地域学習などなかった。今の子どもたちは地域学習を通して、より三川町のことを好きになるのではないかと思った。先日、「ナカナカ三川町」が配布になり、改めて三川の知らなかったことを知った。

○今の子どもたちが自主的に調べ学んだことを地域や家庭に発表する機会があると、自信につながり、大人になって三川のことを本気になって考える人になる。

○この協議会が始まった頃、横山小学校(三川の各学校)の課題が消極性とか発表が苦手ということであった。学校の努力で今は大きく改善がみられる。町全体としても子どもたちの成長を感じている。

○避難訓練を変えようとしていることが大変いいなと感じた。会社での避難訓練はシナリオのある訓練で、予告なしの訓練では役に立たなかった。